多分右筆の誰かと思いますが、中々よく出来ていまして、これを受けた家臣は大狼狽でしょう。然しこの解読が又大変で、こういうものは半分解ったらいいうちです。それにしても、表高二万石の小藩が、よくぞ蒐めたりな八万冊の書籍を、とこれには驚き少なからずで、八百冊でも多いのに八万冊とは――――。

特に、伊賀会員には八月十八日、肺炎症で急逝とあり、全く惜しい人を亡くしました。特に話したこともなかったのですが、話したら一番手応えがありそうに思いまして、何時か一度と思っていたのですが。一周忌までには仏画の色紙の一枚でも、と思っています。

色紙は、小野英治氏にも鴛鴦（おしどり）を一枚さし上げたく思っては居るのですが、何分にも仮急史談会諸子の分が忙しいものですから、まだ描けずに居ります。

しかし、伊賀氏は残念で、こんなこと迄ら一寸でも話をしておいたらよかったのですが、もう今となっては後の祭りで、こうなって見ますと、いつどこでどういう病気で、人というものはこの世を去らねばならぬ様になるものやら、そぞろに悲しくなって来ます。

私が交通事故で負傷するその前夜、よく芝居で「長い夢を見たなあ――、すべては夢だった。この世は夢の世の中だった」というセリフのある場面が出て来ますが、それとそっくりの夢を見まして――。後頭部でも、もう少し下と打っていたら即死する所だったと医者も言っていましたが、これも何かの前兆だったという所でしょう。お互いに、まあどうやら一命だけは助かりまして、目出度き次第です。以上史談誌故掌方々　匆々敬具

十月一日　午後　（以上）

（筆者氏、佐伯史談会顧問
住所。大阪市東淀川区木川東之丁三丁目七）

研究

甘藷考

―どのような経路で佐伯に伝わったか。―

蒲江　小野武夫

戦後超高度成長と、食生活の大変革によって、私たちの食膳から、甘藷は姿をひそめてしまった。かつては私たちの主食であり、それを一年中食って成人していったものであるが、長い間にメモに書き、ノートに集めていた甘藷についてのものを、少しばかり書きつらねて見たい。

清朝の初めごろ（紀元一六一六年前後）、康熙帝が、忌諱（きい―おとがめ）にふれた官女を、南の無人の島に流罪にし、数年経って呼びかえした。さだめし焦燥しているだろうと思っていたのに、案に相違して、官女の肉はこえ、皮膚の色つやもよく、前よりも容色はよくなり、一段と美人になっていた。

帝は不可思議に思って、

「彼の島には何一つ食う物はないのに、何を食って生きていたのか。」

とお尋ねになったところ、官女が答えて申すには、

「初めは食べるものがないので、水ばかり飲んで泣いてばかりいましたが、島一杯にふしぎな蔓草が生えしげっていて、根を掘ると実ができている。それを取ってそのまま、或いは煮焼きして食べ、命をつないでいました。」

とのことである。

康熙帝はそれをきいて、早速役人を島に遣わし、その葉と根をとりよせ、百姓たちに命じて栽植させたところ、官人の言った通り実は根に生じ、味は極めて甘美にして、むさぼり食するも百爽にはちっとも害はない。康熙帝は大いに喜びこれを珍重して、その後、海を渡って訪れ来った琉球王に与えた。

琉球に帰った王は、またこれを栽植して種子が島に贈った。種子が島では、元禄十一年（一六九八）三月、石寺野という所に初めて植えた。そしたら、とれるとれる。もてあますほどとれるので、酢や醤油や、焼酎や、砂糖や、干物や、羊羹や、いろいろなものに作り試食し、結構何でもできる。それが薩摩にわたり、全国にもひろまっていった。救荒食品としてナンバーワンのトップに位した。故に甘藷に唐芋・琉球藷。薩摩藷などの名称で、次第に全国に普及した。

徳川八代将軍吉宗の時、甘藷先生の名で呼ばれた青木昆陽が、享保十八年（一七三三）江戸町奉行大岡越前守忠相に上書して、甘藷の栽培をすすめた。幕府では早速小石川薬園にこれをつくり、種藷として各藩にくばったことは、あまりにも有名である。しかしこれには異説があり、そして各藩に伝わったのにも、それぞれ相違しているところがある。

南蛮人がやって来た前後から、日本人の食生活に大きな変化をあたえ、くらしの内容を豊かにするものが、海のかなたからたくさんもたらされた。それにはサツマイモ、ジャガイモ、トウモロコシ、タバコのように、史上有名なコロンブスのアメリカ発見をきっかけに、新大陸をおとずれた探検隊の手によって、旧大陸にひろまったものもあった。その中の多くは南蛮人の手で、もしくは中国（支那）を中継地として、わが日本列島にもたらされた。

さて、ここで私のとりあげるサツマイモが、わが国にはじめて伝えられたのは、元和元年（一六一五）であったらしい。もともとこのサツマイモはアメリカが原産で、まずヨーロッパへ、さらにヨーロッパから東洋へと伝わってくるのに、実に九〇年ばかり年月がかかり、明の万暦年間（一五八〇年ごろ）南シナにはいったという。支那ではこれを蕃薯といった。慶長十年（一六〇五）琉球の昌寧王は、野国総管を進貢船の使者として明におくったが野国総管は福州で蕃薯を見かけ、鉢植にして持って帰り、沖縄島中頭郡野里・砂辺の両村に植えた。これを聞き知った儀間真常は、野国から栽培法をならい、苗をもらって普及奨励に努力した結果、十五年ぐらいで島中にひろがっていった。

一方、慶長十八年（一六一三）、イギリスは商館を平戸に設け、日本列島や南方諸国との通商の根拠地にしようとして、商船を手にいれて南方貿易にあたらせた。

この船は、名をシーアドベンチュアとよび、船長は三浦按針の名で知られている、ウイリアム・アダムスであった。

このシーアドベンチュアは慶長十九年（一六一四）平戸を出帆したが、浸水が甚だしいために、南方に行くことをあきらめ、那覇までいって、翌元和元年に引きかえした。その時、蕃薯をもって帰ったという。

平戸の商館長コックスは、平戸島中野村藁の葉の畑を借りて、この種薯を植えた。六月十九日のことであった。

「日本ではまだ栽培されたことのないものである。わ

たしは、　　この畑のために、英貨五シリングを税としてはらわねばならない。」

と、その日記にしるしてあるそうだ。こうして南米原産の作物の一つが、日本列島の土に根をおろしたのである。

それから四、五年もたったころこの草は、イモという文字を、サトイモというときは芋、サツマイモは藷、バレイショは薯と書き、自然薯（じねんじょ）ヤマイモも薯と書く。そんなことでこの藷は、もう伊豫（愛媛県）の西南部でつくられるようになっていた。

伊豫に「清良記」という書物がある。この本は土居清良という、宇和島地方にいた大名のことをしるした戦記ものであるが、その中に松浦宗案という農学者が、農作についてこまごまと進言した一巻がふくまれていて、「親民鑑月集」といった。それが書かれたのは永禄年代（一五五八―一五六九年ごろ）であろうといわれているが、農書として役立つものであるから、人々は写しとって利用し、また書きいれを盛んにおこなっている。そのうち元和（一六一五―一六二三）ごろに書かれたものの中に、リュウキュウイモのことが書かれており、

「琉球芋はあたりもの（渡来もの）である。筑紫（ちくし）原ではかざらいもという。これは根ばかり用にたつ。」

とある。

平戸からどうしてそんなに早くつたわってきたのだろうか。あるいは薩摩からつたわったのではないかとも思われる。しかし薩摩にはサツマイモが伝わったのは、その地で出版された「成形図説」によると、

「宝永二年（一七〇五）薩摩摂津（せっつ）那珂郡川郷の人前田利右衛門が、琉球から芋さしもってかえって植えたのが初めてである。」

としるされている。だがこれは少しおかしい。宝永のまえ元禄十年（一六九七）に死んだ宮崎安貞の「農業全書」には、

「薩摩、長崎では琉球芋、また赤芋を多くつくる。」

とあって、薩摩で宝永二年以前にサツマイモをつくっていたことがわかるのである。

では、いつごろからつくられたのであろうか。島津氏の琉球征伐は慶長十四年（一六〇九）二月で、琉球にイモがつたわって四年目であるから、あるいはそのとき鹿児島に持ってきたかとも考えられ、別にルソン（フィリッピン）から慶長十七年にもってきたという口碑もある。

このサツマイモは、前掲の「農業全書」によって紹介されたために、かなりの早い速度で北九州にひろがっていったようで、サツマイモと呼ぶのは、北九州が主とあると「からいも日記」の著者、民俗学者柳田国男は言っている。薩摩の人は、琉球芋とは言わないとも言っている。

宮崎安貞は、安芸（広島県）の浅野藩の藩士、宮崎儀右衛門の二男で、元和九年広島に生まれ、年二十五歳のとき筑前（福岡県）にいき、黒田忠之に仕え、二百石をあたえられた。のち暇をこうて諸国をあるき、老農を訪うては農芸のことをきいては書きとめた。貞享年間（一六八四―一六八七）にふたたび黒田侯につかえ、元禄九年「農業全書」を書きあげた。貝原楽軒・同益軒の兄弟が、よくこれを助けて編纂にあたっている。今日から見ても実にりっぱな農書で、江戸時代中第一であろう。そしてこの本の影響をうけた農書も多い。益軒の知人でもあり、対馬の陶山存（ぞん）もサツマイモについて書いている。対馬では孝行芋といったそうである。さらにこの芋は対馬から南朝鮮へもつたわっていった。

この芋が、急速に九州にひろがっていったのは、台風

の多いこの地帯として、その被害をうけることがすくなく、また畑につくるのに適していたからである。

九州は西辺に島が多く、島は山や傾斜地が多く　平地はすくない。傾斜地は畑にする。畑作としてヒエ、粟・稗、大豆などがあるだけである。そこへサツマイモが登場したのである。新作物であるから税の対象となることも少なく、孝行芋といわれるように収穫が多かった。

そこで痩地・傾斜地を拓き、畑にしてはサツマイモを植えた。貧しいものの食糧としては、きわめてかつこうのものであった。種子が島、屋久島など、サトイモを主食としていた島では、きわめて容易にこの諸にきりかえることができた。沖縄県の島なんかも、無理をして危険な稲をつくることをやめて、このイモを主食糧にするようになった。このようなことから、九州地方の人口は著しく増加してきた。

とくにこのイモが、全国的にひろがっていくきっかけになったのは、享保十七年（一七三二）の飢饉・凶作からであった。この年日本の西南の村々は、天候不良に加えてウンカの発生を及た。稲の葉にゴマをふったようにウンカがついたと思うと、みるみるうちに稲は枯れていった。各地では虫はらいの祈祷をしたが効果が少く、そして遂に九十六万人の死者を出したといわれている。ところが、すでにこのサツマイモが作られていた薩摩や、瀬戸内海の大三島や、九州の長崎地方では被害が少なかった。

そこで将軍吉宗は、長崎のことにくわしい深見新兵衛に、その地方の様子をきくと、

「わたしの父の新右衛門は長崎に住んでいますが、長崎は米三千石ばかり出す土地ですが、市中で商売するものが五百戸もあり、土地の米では到底足りません。そのため諸国から運送して来る米が絶えると、忽ち飢えに反ぶのですが、輸送がとだえても飢えることのないようにと、サツマイモを植えることを教えました。初めのうちはなかなか広まりませんでしたが、享保六年（一七二一）に行ってみますと、ずいぶんつくるようになっていました。これがこのたびのたすけになって、ありがたいことがなかったのでしょう。」

と答えた。吉宗は、心をつよくうたれた。

これよりさき、薩摩から江戸にやってくる船が、ときおり芋をもって来て売っていたが、痰の毒になるという俗説が伝わり、忘れられてしまった。しかし、このことから幕府もサツマイモについて考えるところがあり、そのつくり方を、儒者青木昆陽にしらべさせ、関東平野に植えさせるようにした。それが千葉・埼玉・神奈川などに植えられ、後に主産地となった。

九州以外の地にサツマイモの伝播していった歴史は別の機会にゆずるとして、このイモの出現が、斜して天に至るという風景をつくりだしたのである。サツマイモそのものが人の生活を豊かにしたのではないが、しかし食うものがないために、人口を制限するようなことがなくなった。その反面、労働には不便な傾斜地までひらいて、そこに人をしばりつけ、はげしい労働に従わせ、人々を貧乏にますますくぎづけにしたことは否めないし、筆者また幼少の日から、身をもって体験している。

対馬・壱岐・五島・平戸・天草・甑・種子・屋久・長島などの島々は、おびただしい人が住まようになったのは、このサツマイモの力であったと言っていいのではないだろうか。前掲の「海南小話」の柳田国男のいう「からいも地帯」にでてくる集落も、前記の島々に劣らない。

甘藷は庶民の主食として、生命を支えてきたのである。

「生めや、殖せや」との大東亜戦争中の、国策にそえたことは、何といってもこのイモの力にほかならない。日本のかつての労働資源の供給地は柳田氏のいう「からいも地帯」であったこと、私たちの若かりし日、夷、畑野浦が二つの峠を、朝夕ながめて長大息をくりかえしていた先輩のことを、今の若い人たちは知るよしもない。

あの峠の向うの平地に住めば、昭和の文学者村上浪六の「当世五人男」のヒロイン「豊後の　米」とは云われなかったであろうし、文化文明に遅れること十六年を嘆かずにいたであろう。明治・大正期の繊維産業（紡績・製絲）の女工の供給地が、おおむねこの「からいも地帯」であったことは、忘れられないことである。小林多喜二の「女工哀史」の一人として、淋しく工場の寄宿舎内に散っていった者が、数知れずであったことを、今さら私は思い出す。

イモのことを書いた学者に、日田の大蔵永常がある。永常は、江戸後期を代表する農学者であり、為政者で、明和五年（一七六八）日田に生まれ、米どころに住み、早く南九州を歴訪して農業事情を見聞し、のちに大阪に出て農具の販売など行い、さらに江戸に出て年老いて三河（愛知県）田原藩に仕えたが、永常を登用した著名な渡辺華山が罪せられたため浪人し、浜松藩主、大老として例の天保改革の立役者、水野忠邦の世話になった。しかし忠邦は老中になって、幕府の失政其の他でまた永常は浪人し、八十九才以後の消息は全くわからないが、豊橋あたりで死んだものと考えられる。彼は一生不遇な農学者ではあったが、書き残したものが多い。そしてそれは、新しい農業（商業的農業、金になる農業）の、先駆的指導者として、高く評価されてよい人であった。

なお、イモについて忘れられないのに、次のような女話がある。

享保十七年（一七三二）、井戸平左衛門正明は、新に石見国大森代官に任命された。石見の大森代官といえば、有名な鼠捕りの石見銀山を所管し、かねて管轄区域は石見（島根）・備中（岡山）・備後（岡山）の一部にもわたって、七万八千余石の地を支配したわけだが、正明の赴任の当時は全国的に不作がつづき、無残な飢饉であった。

正明は、領内の飢餓を救わんとし、骨肉をけずるように苦心惨憺したが、代官所の町はずれにある禅刹栄泉寺の恭賢老師に帰依し、雲水から唐芋の話ききき、これこそと雀躍し、出し惜しむ薩摩の人達から、種藷を得て沿海の砂地ある諸村に、村高百石毎に種いも八個づつを与えた。

正明の石見在住は二年にしか過ぎなかったが、彼が始めて移入した甘藷は、ついに百年、百姓を救う糧となった。今日石見地方を旅すると、至るところに「恭靈院殿義岳良忠大居士」とか、「芋殿様」とか刻んだ石標が立ち、神にも祀ってあると聞く。

この領内では、イモをヤツガシラ（八つ頭）と呼んだというが、これは八軒の頭百姓に領布したので呼ぶともいう。このイモは私の考えるところでは、最もうまくない。皮が白く、シヨウが粉に生育し、不作のない品種である。蒲江浦でもそう云っていたことを覚えている。しかし、これは又な正明の遺徳を慕うためで、忌日には芋供養・芋法事が、今なお盛大に行われていると聞く。

ここで、蒲江の今日の発展過程のことを書いた文献で、昭和二十六年発行、郷土新書四四「大分県新書」（篠田九万太著）「いも作りの村」の一節をあげよう。

「浦辺の開発は、海の猟に始まっている。蒲江地区の開拓の端緒は、中世に豊後水道を根拠地として、瀬戸内海の海上権を握っていた、越智族（河野氏）七軒株にはじまる。現在でもいわしや船曳網に頼る地方は、漁獲高が不安なので、「よい越しの金は使わない」という気風がある。猫の額ほどの浦辺に、人口が集中できたのは、甘藷の栽培が行われるようになってからである。」

この言葉には、まったく同感である。入津から蒲江浦に向かい、高山峠から蒲江の町並を車の上から見て、こんなところに、よくもこんなに人が住んだものだと、大ていの人が驚くことであろう。その理由は、この藷と鰯を食って、全精力を出し切って過重な労働を続けてきた先住者の血と汗の賜物である外の何ものでもない。しかしこれからの次の時代をになう若者たちに、一片の感慨が残るだろうか。

しかし、この浦里にイモがいつごろもたらされたものか、今のところ全く手がかりがないが、私はやはり、日向・薩摩からでなく、伊豫から入ったと思う。今は亡き米水津出身の先輩山田平之丞先生も、いものことを「郷土もの」がたり」に三篇書いているが、大分県で藷の栽培をはじめたことは、どこにも書いてない。ただ「甘藷のはなし」の中に、チョッピリ、次の文がある。

「私はかつて、浦代の成松六郎太庄屋の家に伝わっていた、藩庁から種いもをくばった書付を見せてもらった。私の父は安政五年の生れで、さかしかったら百六つかもつになる。その父から聞いたのだ……」

とあるが、年時はさっぱりなく、残念である。米かぬしは金と正月、忌日・祭日に限られ、戦争が初まって、米の配給は万民平等になった。ところが列島内に米が有り余るようになり、やれ減反だ、やれ規制だと騒動やって、荒廃させた田に奨励金が出され、神様、仏様、おいも様となった。戦争中、為政者の苦心の結果のこのイモさえ、品種改良、耕種改善が積極的に行われ、戦いは負けた。

戦争がすんで戦後、昭和元禄。岩戸景気となったよう に、日本列島に超高度成長の春風が吹いて、ソ連に抑留中夢にまで見た銀めしが、毎日たらふく食え、藷は往年の勢威を失い、おさつ族のかげとなり、「耕して天に至った」畑は、セイタカアワダチ草にのりとられ、町内数百町歩は、昔の先住者の入郷のときの如く、四、五頭の猪の暴れるのにまかせ、指をくわえて眺めている。

一握りの人たちの植える施設農業その他でできる高十二号とかいう藷を、テンプラにしてオヤツ代りに珍重している昨日今日、諸弊はあるがかえって「負けまして お目出度う」と言いたい。

先祖たちが、ひだる腹に鞭うって拓いた畑は、前記の如く草ぼうぼう。「義忠死して走狗煮らる」。しかしそれでも唐芋に郷愁を感じ、時おり訪れる従弟にもらったり、行商人から買って焼いたりして食っている。イヤハヤ、日本食糧史上の大革命である。

つぎに、伊豫にいつごろイモが入ったかとは、すでに書いたが、山川出版社刊行の県史シリーズ、「愛媛県の歴史」の中の年表のうちから、イモに関する二、三を摘記して参考としよう。

一、元禄五年（一六九二）　この年、今治藩の江島為信、甘藷苗を日向飫肥（おび）より取り寄せ、大島村へは

じめて植えつけさせる。

一、正徳六年（一七一一）　松山領、大三島瀬戸の下見吉十郎、薩摩国より甘藷種子を持ち帰る。

一、近世の三大飢饉の一つに数えられる享保の飢饉は、のちの天明・天保の両飢饉が東北日本に発生したのに対して、おもに西南日本、しかも松山藩を中心として発生し、諸藩中、松山藩の被害が最大であったようで、七月中旬伊豫郡の野良には、一本の青草もみられない状況となり、米作は収穫皆無、麦作は二～三分作となり（以下略）

この飢饉の惨状の中で、伊豫郡筒井村の百姓作兵衛が、麦種を入れた袋を枕に餓死した。田畑三十三アールの持地と、十五アールの小作地と、合わせて五十アールに足りない農地を耕作していた小農かかれは、近所隣りの者のすすめを拒絶して

「いかにも、種麦を食えば一旦命は助かるだろうが、来年は何で作付するか。百姓にとって命より大切なものは五穀の種……。」

と云って餓死した。

この年の惨状を書いた本が「却睡草」といってあるが、この本に、

「領内越智島一帯の島嶼部で、餓死したものがあったということを聞かないのは、大三島の旧族下見吉十郎が、正徳年間に甘藷を薩摩から持ち帰って栽培させたためであろう。」

と記しており、事実越智島では一人の餓死者も出さず、かえって島方の大庄屋は、正米七〇〇俵を藩に献上するくらいの余裕をもっていた。

大飢饉の二十数年導入された甘藷の、救荒作物としての価値が大いに認識され、今も越智郡下浦村には、吉十郎の造立になる地蔵像があって、村民の崇敬を高めている。

当時の本県の惨状を似たようなもので、「大分県災害誌」によると、

「天領日田には、代官増田太兵衛、前より甘藷栽培をすすめて餓死者なく、増田を藷代官という。」

と、これは「別府史談」にもある。

わが蒲江町ではどうであったか。王子神社宮司延田清隆編「当浦日記」を漁ったが、一字も発見に至らないので、比較的産業や衛生にくわしい同書の中に見えないというのは、やはり前記のようなことであったのではないであろうか。勿論米作地帯ではないが、イワシが豊漁なら、餓死するものなどなかったはずである。

すでに書いたように、サツマイモは南伊豫の諸島からはいったのではないであろうか。

南郡および佐伯市には、古来伊豫とは人事の往来多く、蒲江浦の六割以上が伊豫人のにおいがする。先ず第一にわたしたちの日常使っている言葉の中に、伊豫なまりが多く、特に生活用語に多いが、そのことは別の機会にゆずり、宇和海はじめ南伊豫の島々は、早くからイモを耕作しており、大正期以後も当地に不足分のホシイモなどは、この方面から買いうけて、旧盆後宇和島の和霊神社の参詣の大半の漁民は、その補給食糧の購入のためであったとは、云いすぎであろうか。

今一つは旧藩政時代大庄屋職を下浦郷で勤めた、現大分県議会議員御手洗氏の祖考、御手洗若狭守信秀が蒲江浦に入郷、佐伯藩主初代高政公鶴屋城建築中に、御手洗家の祖先源太夫が、浦辺名産の鰮（いわし）を献上した

ことは、「鶴藩略史」にもあり、その以前同家は、前記大三島の醸の大濱下島（かちの御手洗の地）に在り、現在広島県豊田郡豊町に、明治の中ごろまで、山ノ神として、あまりにも著名な大山祇神社に、例年御手洗家当主、皆くは代家潮田宗家が船さしたて、常に往復していた。

その縁故で殖産興業に熱意のあった、御手洗家歴代当主の方が、見すごされる筈はないと思われたので、先般御手洗氏に電話でおたずねしたが、あまりきいていないらしく、私は残念であった。

ご存知の如く、薩摩は閉鎖的な国柄で、七島藺移入の橋本五郎左衛門の苦心さ見てもわかるが、上入津地区畑野浦の史談会長で、元村長富沢恭氏が、先年青年団のため御色した、藷の伝来についての地狂言があったと聞いたので、早速折よく来宅した同会員富髙宇喜久君を通じ、文献走り書を要望したが、富沢氏多忙のため入手出来ないので、取り敢えずこの稿を綴ったわけである。

サツマイモについては、なお手許に文献もあるが、永らくペンをとらず、筆を折って久しいのでまとまりもなく、羽柴先生の迷惑を承知で書いているような始末、今回は一応この辺りでペンを収めたい。

尚、引きつづいてイワシ、ブタ、シンジュなど、郷土の、かつての特産の歴史について、今後生ある限り、医王山下、鎮守の森のほとりに住んで、他の人のやらない歴史を掘り出して続けてみたいので御容捨願うとして、又この文を幸い読んで下さった方々、佐伯地方にイモの伝播した歴史など御承知なら、どうか御教示下さるよう、お願いする次第である。

（おわり）

（注）本文の一部は、平凡社刊「風土記日本」第一巻 九州・沖縄篇に拠った。

研究

佐伯宿祢久良麻呂

会員 佐脇貫一

神護景雲元年（七六二）八月、豊後守に任ぜられた佐伯宿祢久良麻呂は、やがて豊後国に赴任したが、海部郡穂門郷に着船し、この地に居住したと伝えられる。それは豊日志の所説で、「神護景雲中、豊後守佐伯宿祢久良麻呂居住于穂門、遂名其地、後世以為荘、換今治城西南皆佐伯境」という記述である。豊後国志がこの説を引用したため、郷土史を学ぶものは、あたかも久良麻呂が穂門に着任して、その地に政庁（国府）を開いたように誤解し、豊日志の記述を鵜呑みにして、久良麻呂やその子孫が穂門に居住したため、佐伯の地名がおこったとしている。すなわち豊日志の「常山久良麻呂子、尋為郡司、自是世居焉」の記述によって、海部郡常山（海部郡大領）を久良麻呂と結びつけ、久良麻呂の穂門居住を史実化して、佐伯の地名起元を説明しようとしているのである。

それでは佐伯宿祢久良麻呂とはどのような人物で、当時の朝廷ではどのような地位にあった人であろうか。私はさきに諸国の佐伯について記述したとき、佐伯宿祢は大和朝廷の武官で、大伴連の一族、佐伯部の統率者であったと書いたが、これは日本書紀や続日本紀などの国史を読めばわかる。佐伯宿祢の佐伯は一族を現わす氏であり、宿祢は一族の家格すなわち姓（かばね）である。

いま手元にある続日本紀から、久良麻呂と同時代の族人、佐伯宿祢を撰り出すと、三野・国麻・伊多智・助（たすく）・真守・家継・毛人（えみじ）・三方・髙丘・今毛人（い